南アフリカ軍事史１９７５－１９８８

きらと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

南アフリカ軍事史１９７５－１９８８

【Ｎコード】

Ｎ９３４４Ｚ

【作者名】

きらと

【あらすじ】

過度な期待はしないで下さい。個人的にまとめた内容です。引用して間違っていても当方では責任を負いません。

1．Ｒｅｃｃｅとか**EO**について

小説やＴＶ、ゲームの主人公は危機に陥っても最後には勝つ。シュワルツェネッガー主演の「コマンドー」では、元コマンドー隊員のメイトリックス大佐が単身、敵地に乗り込み暴れまわった。

そんなヒーローの活躍に、幼い頃の誰しもが憧れるだろう。

自称元グリンベレー大尉の日本人作家がいる。彼の経歴ではコンゴ動乱に参加したと言う。

彼の作品の影響で、アフリカの紛争や内戦の影に傭兵のロマンを感じ、精強な男たちに幻想を抱いた。しかし大人になると夢も覚める。グリンベレー云々は、広告戦略であり経歴詐称なのかもしれない。

彼の経歴の真偽はともかく、一騎当千の男たちがアフリカには実在した。

ローデシアＳＡＳやセルース・スカウツ。南アフリカのＲｅｃｃｅや第３２大隊。南西アフリカのＫｏｅｖｏｅｔがそれだ。（ローデシアＳＡＳ、セルーススカウツ、第３２大隊、Ｋｏｅｖｏｅｔについては後述）

ＣＯＩＮ作戦で戦果をあげた彼らは、政治的な敗北により歴史の表舞台から姿を消した。

冷戦時代、米国は反共を条件に軍事独裁政権を支援した。アパルトヘイトを掲げる南アフリカやローデシアもその一つだ。

東西融和のデタント時代以降には世界情勢も大きく変動し、援助も打ち切られる事となる。大国の都合に翻弄された戦争を長引かせられた彼らも被害者である。

南アフリカ国防軍は実際、２０年前までＳｏｕｔｈ　Ａｆｒｉｃａｎ　Ｂｏｒｄｅｒ　Ｗａｒでソ連・中国・東ドイツ・キューバが周辺諸国に軍事顧問団を送り込み、それを相手に３０年近く戦争し

ていたので、精強と言えたが、その不正規特殊作戦は人道的にも問題点が多く、単純に戦果を絶賛する事は出来ない。ＲＥＮＡＭＯへの支援も例としてあげられる。

Ｓｏｕｔｈ　Ａｆｒｉｃａｎ　Ｂｏｒｄｅｒ　Ｗａｒとはなにか？　１９６６年から１９８９年まで、ポルトガル植民地戦争とその延長でアンゴラと、南西アフリカを舞台に複数の国家・団体が入り乱れて戦った戦争の事で、ポルトガルの脱落が大きく影響を与えている。

ポルトガル植民地戦争が首都リスボンで発生したカーネーション革命の結果、海外州の独立で終わると、ポルトガル領東アフリカはモザンビークとして独立した。隣接するローデシアは危機感を覚えて、ＲＥＮＡＭＯを組織してモザンビーク領内で破壊活動を実施する。ローデシアがジンバブエとして独立後は、南アフリカがスポンサーとなる。

このＲＥＮＡＭＯだが、子供を誘拐して兵士として育て上げるなど非人道的行為を行っていた。少数精鋭の特殊部隊は格好が良いと全てを肯定するわけにはいかない。

南アフリカ国防軍の行った最初の特殊作戦は１９６８年のビアフラだ。

当時の実戦部隊として、銃剣の交差した×印の部隊章を付けた作戦実験ティーム（Ｏｐｅｒａｔｉｏｎａｌ　Ｅｘｐｅｒｉｍｅｎｔａｌ　Ｔｅａｍ）が存在した。

Ｒｅｃｃｅの名称が歴史の表舞台に登場したのはローデシア紛争の最中だ。

当時アフリカに於ける反共の最前線として周辺を囲まれていたローデシアは、連日の戦闘で疲弊しながらも南アフリカの支援で維持されていた。そんな中、ＳＡＤＦからローデシアＳＡＳのＤ中隊としてブレイテンバッハ大尉たちが派遣された。（ブレイテンバッハは、第１偵察コマンドーと第３２大隊の初代指揮官として軍事史に

名前を刻んでいる。最近出版された、ローデシアのファイアーフォースの書籍に付属しているＤＶＤにも出演しており存命が確認される）

ローデシアＳＡＳは１９５０年代にマラヤ動乱でＣＯＩＮ作戦で活躍したマラヤスカウツを前身とする英国陸軍ＳＡＳのＣ中隊から伝統を継ぐ部隊だ。

ＣＯＩＮ（Ｃｏｕｎｔｅｒ　Ｉｎｓｕｒｇｅｎｃｙ：対叛乱鎮圧）作戦の真髄を実戦で学び取った彼らは、南アフリカに帰国後、ＳＡＤＦに習熟した部隊運用や戦技を反映させて、１９７２年１０月１日に第１偵察コマンドー（１　Ｒｅｃｏｎｎａｉｓｓａｎｃｅ　Ｃｏｍｍａｎｄｏ）が誕生する。小説やゲームにも出てくるレックス・コマンドーだ。発音としてはレキースが正しいそうだ。

記述を色々見ていると年代が前後するが、第１偵察コマンドーは１９６６年８月２６日に、最初のＣＯＩＮ作戦を実施している。指揮官はＪ．Ｄ．ブレイテンバッハ大尉。目的は、ＳＡＰの支援をしてＳＷＡＰＯの訓練基地を叩く事。

その後、特殊部隊は増殖していき１９７４年６月１日にハンターグループ（Ｈｕｎｔｅｒ　Ｇｒｏｕｐ）を母体に第２偵察コマンドー、１９７６年５月１日に第３偵察コマンドー、１２月５日に第５偵察コマンドーが、１９７８年７月１４日に第４偵察コマンドーが、１９８０年３月１４日にはローデシアＳＡＳを母体に第６偵察コマンドーが編成された。

Ｒｅｃｃｅは、南アフリカ境界戦争で周辺国に越境作戦を展開した。ローデシアが消滅した後は、セルーススカウツ、ＳＡＳメンバーがＳＡＤＦに加わり人材面で拡充される。

冷戦後は、部隊を取り巻く状況が変化し紆余曲折を経て、第４５落下傘旅団から特殊部隊旅団として再編成された。

武勲輝く１ＲＣは、１９８１年６月１日、第１偵察連隊に、１９９３年８月１日、第４５２落下傘大隊に、１９９４年４月２２日、弟１特殊部隊連隊にと改編が続き、１９９７年３月３１日に解散す

る。
　他の部隊も改編が激しい。偵察コマンドーから偵察連隊、落下傘大隊、特殊部隊連隊と変動し、現在存在するのは第４特殊部隊連隊と第５特殊部隊連隊で、部隊章も４ＲＣ、５ＲＣと同様である。

　傭兵としての物語を書くには、これほど実戦経験豊富で魅力的な素材も少ない。Ｒｅｃｃｅの隊員は、民間軍事会社の始祖であるＥｘｅｃｕｔｉｖｅ　Ｏｕｔｃｏｍｅｓ（ＥＯ社）にも流入している。
　ＥＯ社は、アパルトヘイト時代、南アフリカ国防軍の精鋭第３２大隊の副大隊長だったエーベン・バロウズ元中佐が、マンデラ政権で失業した、第３２大隊、Ｒｅｃｃｅ、ｋｏｅｖｏｅｔ、それと敵だった民族の槍（ゲリラの実戦部隊）。これらの隊員を集め、合法的に株式会社として南アフリカに拠点を置いた実戦経験者の多い人材派遣会社だ。
　第３２大隊（バッファロー大隊）は、アンゴラからの元ＦＮＬＡゲリラと反共産主義の兵士、南アフリカ国防軍の将校で構成された。最も成功した対反乱鎮圧部隊としてアフリカ軍事史に名を刻んでいる。
　もっとも、アンゴラの戦いに投入された戦力が限られていた為、最初のサバンナ作戦から最後まで参加していれば、当然、戦果を上げる訳だ。
　ＥＯ社のアンゴラやシェラレオネでの活躍は歴史的事実で、この会社が嫌いな人間でも否定できない成果をあげている。
　レオナルド・ディカプリオ主演の映画「ブラッド・ダイヤモンド」に出てくる民間軍事会社はこのＥＯ社がモデルだ。ディカプリオ演じる主人公はローデシア出身の設定で、刑務所のシーンでは右腕に第３２大隊の部隊章である牛の刺青が写っている。

2．略語と用語（1）

南アフリカが相手に戦った交戦相手の団体・組織名は長いため頭文字を取って略称で記載されている事が普通だ。ベトナム戦争で敵側をＶＣ（Ｖｅｔ　Ｃｏｎｇ）やＮＶＡ（Ｎｏｒｔｈ　Ｖｉｅｔｎａｍｅｓｅ　Ａｒｍｙ）と略していたのと同様だが、一般的には聞き慣れない呼称であることに代わりはない。

例えばベトナム戦争の資料ではＴｈｅ　ｈｏｌｅと言う単語が出てくるが、即座にＴｅｒｍ　ｕｓｅｄ　ｂｙ　ｒｅｃｏｎ　ｔｅａｍｓ　ｆｏｒ　ｌａｎｄｉｎｇ　ｉｎ　ａ　ｓｍａｌｌ　ａｐａｃｅ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｊｕｎｇｌｅだと理解できる者は少ないだろう。

全ての略語を記載するには多すぎるので、今回は、複数の資料をつき合わせて主だった物を抜粋して見た。

1．団体・組織名：耳慣れない用語が多い。

ＡＮＣ：Ａｆｒｉｃａｎ　Ｎａｔｉｏｎａｌ　Ｃｏｎｇｒｅｓｓ
アフリカ民族会議。アパルトヘイト時代は、「民族の槍」と言う戦闘部門を組織してゲリラ戦を展開していた。当然、当時の南アフリカ政府からはテロ組織として睨まれていた。かつては非合法組織で、現在は政党の一つ。勝てば官軍の見本。

ＡＰＬＡ：Ａｚａｎｉａｎ　Ｐｅｏｐｌｅ'ｓ　Ｌｉｂｅｒａｔｉｏｎ　Ａｒｍｙ　ＡＮＣの民族の槍と同様、ＰＡＣ（パンアフリカニスト会議）の実戦部隊。直訳したら人民解放軍になってしまう。

Ｂｎ：Ｂａｔｔａｌｉｏｎ　大隊

ＣＯＳＡＴＵ：Ｃｏｎｇｒｅｓｓ　ｏｆ　Ｓｏｕｔｈ　Ａｆｒｉｃａｎ　Ｔｒａｄｅ　Ｕｎｉｏｎ　南アフリカ労働組合会議。

ＣＰ：Ｃｏｎｓｅｒｖａｔｉｖｅ　Ｐａｒｔｙ　保守党と言う南

アフリカの政党で、現在は存在しない。
CSI：Chief of Staff Intelligence SADFの情報本部。CS－2の事。ちなみに作戦担当はCS－3（Chief of Staff Operations）となる。
FAPA：英文で→People's Air Force of Angola アンゴラ人民空軍。
FAPLA：英文で→People's Armed Force for the Liberation of Angola アンゴラ解放人民軍。アンゴラ正規軍の総称。
FNLA：英文で→National Liberation Front for Angola アンゴラ民族解放戦線。
FRELIMO：英文で→Liberation Front for Mozambique モザンビーク解放戦線。モザンビークの政党。その名前の通り、ポルトガル植民地戦争の頃はゲリラ、ポルトガル政府から見れば叛乱軍。
IFP：Inkatha Freedom Party インカタ自由党。南アフリカの政党の一つ。
MK：Umkhonto we Sizwe（Spear of the Nation－the ANC's armed wing）ANCの戦闘部門、民族の槍。これで政争に負けていたら、ただのテロリストで終わっただろう。メンバーはExecutive OutcomesやSADFに雇用されている。
MPLA：英文で→Popular Movement for the Liberation of Angola アンゴラの政権を取った方。アンゴラ解放人民運動。
OAU：Organization of African Unity アフリカ統一機構。
PAC：Pan African Congress パンアフリカニスト会議。かつては非合法組織で、現在は政党の一つ。

PLAN：People's Liberation Army of Namibia（SWAPO's armed wing）
SWAPOの戦闘部隊。南アフリカ政府から見れば、ただのテロリスト。

SAAF：South African Air Force
南アフリカ空軍

SADF：South African Defense Force　南アフリカ国防軍。現在は名称が変わっている。

SAP：South African Police　直訳すれば南アフリカ警察だが、ローデシアの警察（BSAP：British South Africa Police）と混用を注意。

SWA：South West African　南西アフリカ。現在のナミビア。第一次世界大戦ではドイツ領だったが、南アフリカがどさくさに紛れて自国に併合した。

SWAPO：South West African People's Organization　南アフリカから見れば完全にテロリスト。

SWATF：South West African Territorial Force　南西アフリカ地域軍。1980年8月1日に激化するSWAPOの反乱（ナミビア独立戦争）に対処するため編成。SADFの指揮下にあった。

TRC：Truth Reconciliation Commission

UDF：United Democratic Front　南アフリカの反アパルトヘイト運動を行った統一民主戦線。反政府組織として活動を禁止されていた。

UNITA：英文で→Union for the Total Independence of Angola　アンゴラ全面独立民族同盟

USSR：Union of Soviet Socialis

ｔ　Ｒｅｐｕｂｌｉｃｓ　西側陣営の敵で東側陣営の盟主、ソ連。アンゴラにも軍事顧問団の派遣や援助を行っていた。

２．軍事用語あれこれ：南アフリカは英国の影響下にあった為、軍事編成や用語も英語の物が多い。当然ながら米軍や自衛隊の部隊符号の教範に記載されている物と異なる物もある。日本語だと中隊は中隊でしかないが、ｂａｔｔｅｒｙ、ｃｏｍｐａｎｙ、ｓｑｕａｄｒｏｎと職種（兵科）で異なる。陸自の特科はバッテリーなどと呼ばない。

ＡＡ：ａｎｔｉ－ａｉｒｃｒａｆｔ　対空や防空。

Ｂａｔｔｅｒｙ：部隊符号による表記だと中隊となっている。ＳＡＤＦ砲兵は２個小隊によって構成される。指揮官は少佐。略語はＢｔｙ。中隊を砲兵ではｂａｔｔｅｒｙ、歩兵ではｃｏｍｐａｎｙ、装甲車ではｓｑｕａｄｒｏｎと呼ぶ。

ＢＣ：Ｂａｔｔｅｒｙ　Ｃｏｍｍａｎｄｅｒ　砲兵中隊長

Ｂｄｅ：Ｂｒｉｇａｄｅ　旅団。指揮官は大佐。

ＢＫ：ｂａｔｔｅｒｙ　ｃａｐｔａｉｎ　直訳すると砲兵大尉になってしまうが、役職から中隊の補給将校を意味する。

ＢＰＯ：砲兵配属将校。

Ｂｒｉｇ：Ｂｒｉｇａｄｉｅｒ　旅団長。

ＢＳＭ／ＴＳＭ：Ｂａｔｔｅｒｙ　Ｓｅｒｇａｎｔ－Ｍａｊｏｒ／Ｔｒｏｏｐ　Ｓｅｒｇａｎｔ－Ｍａｊｏｒ　ようは中隊や小隊の先任下士官。

Ｃａｐｔ：Ｃａｐｔａｉｎ　大尉。

Ｃｍｄｔ：Ｃｏｍｍａｎｄａｎｔ　中佐。

Ｃｏｌ：Ｃｏｌｏｎｅｌ　大佐。

Ｃｐｌ：Ｃｏｒｐｏｒａｌ　伍長。

ＤＦ：ｄｅｆｅｎｓｉｖｅ　ｆｉｒｅ　火力支援。

DLI：Durban Light Infantry ダーバン軽歩兵。
Div：Division 師団。
FCP：fire－control post 射撃統制点。
FSCO：Fire Support Co－ordination Officer 火力調整者。
Gen：General 将軍。
ICV：infantry combat vehicle 歩兵戦闘車。
Log：Logistics 兵站。
Maj：Major 少佐。
OP：observation post 観測所、監視所。
Path Findor：降下誘導。
POW：prisoner of war 捕虜。
Regiment：部隊符号の表記が大隊になっていた。SADF砲兵の構成は砲兵3個中隊と支援中隊からなっている。指揮官は中佐。砲兵と装甲車はregiment、歩兵ではbattalion、となっている。
Rfn：Rifleman 小銃手。
RHQ：Regiment headquarters 連隊本部。
SAA：South African Artillery 南アフリカ国防軍砲兵。
Troop：部隊符号による表記だと、点が3つ並んでいたので小隊だと判断できる。SADF砲兵の構成は火砲4門と表記されていた。砲兵と装甲車はtroop、歩兵はplatoonとなっている。

3．装備品：参考程度。

ＡＫ４７：ソ連製７．６２?自動小銃。世界的なヒット商品で、あらゆる戦場で使用された。コピー製品も多く出回っている。
Ａｌｏｕｔｔｅ：フランス製軽ヘリコプター。火力支援、偵察、救助に使用された。ローデシアではＧ－Ｃａｒの呼称で人員輸送に、Ｋ－Ｃａｒの呼称で攻撃に使われた。一方、本家のＳＡＡＦではＧｏｌｆ　Ｓｉｅｒｒａ（ＧＳ　ガンシップ）と呼称されていた。
ＡＮ２６：ソ連製アントノフ輸送機。ＦＡＰＬＡでソ連とキューバの搭乗員に操縦された。
ＡＰＰＭＩＳＲ：ソ連製地雷。
ＢＭＰ１：ソ連製歩兵戦闘車。対戦車ミサイルに７３?機関砲まで装備している。
Ｂｏｓｂｏｋ：ＳＡＡＦが保有するイタリア製単発エンジン搭載の軽偵察機。
ＢＲＤＭ－２：ソ連製装甲車。１４．５?と７．６２?機銃を搭載。
ＢＴＲ６０：ソ連製装甲車。１４．５?機関砲搭載。
Ｂｕｃｃａｎｅｅｒ：英国製攻撃機。
Ｂｕｆｆｅｌ：ＳＡＤＦが地雷対策で開発した装甲車。
Ｃ１３０：ハーキュリーズ。４発エンジンの輸送機。米軍や空自でも保有している為、著名な機体。
Ｃ１６０：トランザール。フランス製の輸送機。
Ｄ３０：ソ連製１２２?砲。射程１５?。
Ｄ７４：ソ連製１２２?砲。射程２４?。
ＤＫＺ　Ｂ：ソ連製１２２?ロケット発射筒。
Ｄｒａｇａｎｏｖ：ソ連製７．６２?狙撃銃。色々な作品にも出ており知名度は高い。
ＤＳＨＫ　３８／４６：１２．７?機関砲。
Ｅｌａｎｄ９０：フランス製パナール装甲車の派生系で、９０?砲を搭載されたＳＡＤＦ仕様。

Ｇ１：ＳＡＤＦが装備した８８？野砲。
Ｇ２：ＳＡＤＦが保有した１５５？野砲。元は、第二次世界大戦で使用された骨董品な５．５ポンド砲。射程１６？。
Ｇ５：アンゴラにおいてＳＡＤＦ砲兵は、既存の装備では射程不足だと痛感した。この為、ＳＡＤＦが開発した１５５？榴弾砲。射程４８？。
Ｇ６：Ｇ５の自走型。陸自の保有するＦＨ－７０はＡＰＵで動くが、Ｇ６は完全な自走。
ＧＰＭＧ：７．６２？機関銃。
Ｉｍｐａｌａ：ＳＡＡＦ戦闘機。
Ｍ５５：３連装３０？対空機関砲。
Ｍ７９：４０？擲弾発射筒。ベトナム戦争でも使用されており、著名な火器。
ＭＡＧ：ベルギーＦＮ社製７．６２？軽機関銃。
ＭＩ８、ＭＩ１７：ソ連製汎用ヘリコプター。
ＭＩ２４、ＭＩ２５、ＭＩ３５：ハインド。ソ連製強襲ヘリコプター。Ｇｏｏｇｌｅの地図で拡大すると撃墜されたハインドが見れる。
ＭｉｇＩ７：ソ連製単座戦闘機。迎撃機。
Ｍｉｇ２３：ソ連製汎用機。戦闘爆撃、対空戦闘の迎撃任務などもこなす。
Ｍｉｌａｎ：ＳＡＤＦが保有したフランス製対戦車ミサイル。
Ｍｉｒａｇｅ　Ｆ－１ＡＺ：ＳＡＡＦが保有したフランス製の主力攻撃機。
Ｍｉｒａｇｅ　Ｆ－１ＣＺ：ＳＡＡＦが保有したフランス製の迎撃機。
Ｏｌｉｆａｎｔ：ＳＡＤＦが保有した主力戦車。
ＰＫＭ：７．６２？機関銃。
ＰＴ７６：ソ連製軽戦車。
Ｐｕｍａ：ＳＡＡＦが保有したフランス製輸送ヘリコプター。

Ｒ１：英国のＳＬＲ、ベルギーのＦＮと同じ。ＳＡＤＦ仕様の７．６２？自動小銃。
Ｒ４：イスラエルで開発されたガリルの派生系。ＳＡＤＦ仕様の５．５６？自動小銃。
Ｒ５：落下傘部隊、ｋｏｅｖｏｅｔで使用されたＲ４の小型仕様。
Ｒａｔｅｌ：ＳＡＤＦの装甲戦闘車で様々な派生系が存在する。例えば、Ｒａｔｅｌ２０は２０？機関砲と７・６２？機関銃を搭載しており、Ｒａｔｅｌ９０は対戦車戦闘を想定して９０？砲を搭載している。Ｒａｔｅｌ　ＺＴ３は１２７？ミサイル発射機を搭載しておりユニークだ。
ＲＰＤ：７．６２？機関銃。
ＲＰＧ：ソ連製４０？ロケット発射筒。歩兵の携帯火器として、戦闘車輌に驚異を与える事ができる偉大な兵器。
ＳＡ２：ソ連製地対空ミサイル。射程４０～５０？。
ＳＡ３：ソ連製地対空ミサイル。射程２９？。
ＳＡ７：ソ連製携帯地対空ミサイル。
ＳＡ８：ソ連製短距離地対空ミサイル。ＢＲＤＭ－２に搭載している。
Ｓａｂｒｅ：ＳＡＤＦ偵察用の軽車輌で７．６２？機関銃を搭載している。
Ｓｔｉｎｇｅｒ：携帯地対空ミサイル。アンテナを広げて撃つ。発射筒自体は使い捨て。
Ｓｕｐｅｒ　Ｆｒｅｌｏｎ：ＳＡＡＦが保有したフランス製ヘリコプター。
Ｔ３４、Ｔ５４、Ｔ５５、Ｔ６２、Ｔ６５：ＳＡＤＦと対峙した敵側が使用したソ連製主力戦車。Ｇｏｏｇｌｅの地図で拡大すると撃破された戦車が見える。
Ｕｎｉｍｏｇ：不細工なデザインに味わいがあるＳＡＤＦの特徴的な装輪装甲車。ちなみにメルセデス・ベンツ製だと言う。

3．素晴らしき32　Battalion

1．歴史には山も落ちもない？

「向こうが殴ってくるから身を守っただけです」

「いやいや、それを言うなら！」

どちらが先かを言っても不毛だ。お互いの主張するもっと昔に戦争は始まっていた。

白人の植民地支配は結果として悪だが、帝国主義の時代には、西欧諸国が行っていた国際社会の常識で、現代人の感覚で批評する事はあっても一方的批判をする事は卑怯だ。日韓併合を延々と半世紀以上も問題にする事と同じだ。

南アフリカは第二次世界大戦終結後も、半世紀近く戦う事になると予想したのだろうか？　答えは否だ。彼らの論理では当初はテロとの戦いであり、その後は共産主義者の支援を受けた叛乱だった。兵器水準や部隊編成を考えれば理解できる。軍事侵攻を本格的に行うには動員された兵力が限定された物だった。では、いつ南アフリカは本気になったのか？　これは、キューバの正規軍派兵がきっかけだと考えられる。

南アフリカによる南西アフリカの統治は、現地の独立派を押さえる事に失敗し、不満分子は、ゲリラによる武装闘争に向け動き出した。

ＳＷＡＰＯ（Ｓｏｕｔｈ　Ｗｅｓｔ　Ａｆｒｉｃａｎ　Ｐｅｏｐｌｅ's　Ｏｒｇａｎｉｚａｔｉｏｎ）の実戦部隊であるＰＬＡＮは、アンゴラを拠点に活動開始する。

治安情勢の悪い社会において、武装ゲリラと化したテロリストと戦う警察と、軍の境目は曖昧だ。南アフリカに限らず、警察特殊部隊は准軍事組織としての色合いも濃く、軍や情報機関の影響下で活

動した。
例えば、ポルトガルのＦｌｅｃｈａｓ（矢）はＰＩＤＥ（Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ ａｎｄ Ｓｔａｔｅ Ｄｅｆｅｎｃｅ Ｐｏｌｉｃｅ）海外州警察に作られた。Ｋｏｅｖｏｅｔも南西アフリカ警察の対叛乱鎮圧作戦部隊だし、ローデシアのセルーススカウツも元は警察だ。さらに南アフリカ警察は、第二次世界大戦で警察大隊を編成して、北アフリカ戦線に投入された。戦闘の形態が正規軍との戦争と叛乱鎮圧で違いはあるが、実戦経験は積んでいた。それでも、警察と軍隊では継戦能力が決定的に違う。
警察力だけでは対処不能なこの事態に、南アフリカも黙っていた訳ではない。

１９７５年９月２４日、ＦＮＬＡとＵＮＩＴＡを支援する４段階に作戦を南アフリカ政府は立案した。
１１月５日。南アフリカは全てにけりをつけるべく軍事行動を開始する。方針は明確だった。敵対するテロリスト（ＳＷＡＰＯ）と支援国家であるアンゴラに裁きの鉄槌を下す。
１１月１４日１４００時、サバンナ作戦発動。この作戦に第３２大隊の原型であるＢ戦闘団（Ｂａｔｔｌｅ Ｇｒｏｕｐ）が参加した。
史実で南アフリカ国防軍は、装備・練度で劣るアンゴラ軍を圧倒し、アンゴラ南部を席巻した。無人の広野を駆けると言う表現が似合う快進撃だった。
「南アフリカが遂にキレたそうだよ」
「え？」
南アフリカの強硬手段は、共産圏の国々だけではなく、西側諸国にも不安を与えた。
結果、国連は南アフリカへの制裁を決定する。
だからと言って、南アフリカは決断を変えなかった。連日、国内で善良な市民がテロの被害に晒されている。敵の攻撃はすでに始ま

っている。それなのに、黙って耐えれるのか？　名誉ある孤立を選んだ南アフリカは、アンゴラへの全面介入を加速させていく。
一方のアンゴラ政府も焦っていた。まさか、南アフリカがここまで本気になるとは考えてもいなかった。
東側の盟主であるソ連に泣きつき、キューバ軍が代わりに送り込まれる事となった。
当初、南アフリカは限定攻勢による制裁を目的としていた。しかし、キューバ軍の参戦により、本格的戦争へと突入する。相手側が正規軍を投入してきた。軍事顧問と言うレヴェルではなく完全な実戦部隊だ。戦いは加速していく。

歴史としてオチだけ語ると、南アフリカはナミビアを切り離す事で自らの生存を図った。黒人との融和や政権交代、軍の再編、あれやこれやで現在は白人への差別や治安問題を抱える状況に至っている。
ザイールやジンバブエの現状を考えると、南アフリカはまだましな方かもしれない。戦後半世紀の間、内戦もなく飢えた経験もない日本人は恵まれていると思えた。

2．第３２大隊の戦歴。

第３２大隊の歴史は、南アフリカ国防軍がアンゴラで展開した越境作戦の歴史と言っても良い。個別な作戦の詳細については後述するが、具体的に主要な作戦名をあげるとこれだけある。

Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｓａｖａｎｎａｈ（１９７５）★　最初の作戦。
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｂｄｇｉｅ（１９７６）◎　クイット川東西を起点に６月から１０月にかけて行われた作戦。Ｔ３４が現役で

登場している。
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｔａｍｂｏｔｉｅ（１９７６）◎　４月２８日から５月１日にかけて行われた作戦。第１偵察コマンドーから４名が参加した。
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｓｅｉｌｊａｇ１（１９７６）第３２大隊に公式に名称が替わってからの作戦。
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｂｕｃｋｓａｗ　（１９７７）　◎　作戦指令第２１号。３月２８日から５月２１日にかけて行われた作戦。第１落下傘大隊と第８大隊も投入された。
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｓｅｉｌｊａｇ２（１９７７）
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｓｅｉｌｊａｇ３（１９７７）
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｋｒｏｐｄｕｉｆ（Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｐｏｕｔｅｒ　Ｐｉｇｅｏｎ）（１９７７）◎１０月２２日１７００時から１０月２９日０６４５時にかけて行われた作戦。
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｓｅｉｌｊａｇ４（Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｙａｃｈｔ）（１９７８）
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｒｅｉｎｄｅｅｒ（１９７８）★　４月２２日から５月１０日にかけて行われた作戦。第４４落下傘旅団と共に第３２大隊は投入された。アンゴラ領内２５０?に進出し、ＳＷＡＰＯゲリラの訓練所及び兵站施設を襲撃した。
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｄｒｉｅｈｏｅｋ（ｔｒｉａｎｇｌｅ）（１９８０）◎　２月４日から４月２２日にかけて行われた作戦。
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｍａｋａｌａｎｉ◎　２月２０日から３月２５日にかけて行われた作戦。第３２大隊及び第５２大隊が投入された。
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｌｏｏｄｖｏｅｔ（Ｌｅａｄ　Ｆｏｏｔ）◎
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｆｅｒｒｅｌｒａ◎　４月３０日から５月２３日にかけて行われた作戦。
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｔｉｒｏ－ａ－Ｔｉｒｏ（Ｓａｖａｔｅ）（１９８０）◎　５月１５日から５月２４日にかけて行われた作戦。

Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｓｃｅｐｔｉｃ　（Ｓｍｏｋｅｓｈｅｌｌ）（１９８０）★　５月３０日から６月２９日にかけて行われた作戦。ＳＡＤＦは第６１機械化大隊、第１落下傘大隊、第３２大隊、第１大隊から抽出した５個戦闘団を投入した。

Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｖａｓｔｒａｐ（Ｓｔａｎｄ　Ｆｉｒｍ）（１９８０）☆７月２８日から３月１６日にかけて行われた作戦。

Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｂｕｔｔｅｒｅｌｙ（１９８０）◎　９月２日から２月１２日にかけて行われた作戦。

Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｚｕｌｕ（１９８１）◎　６月４日から２月１７日にかけて行われた作戦。

Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｈｏｕｔｐａａｌ（Ｗｏｏｄｅｎ　Ｐｏｌｅ）◎　４月１４日から５月２７日にかけて行われた作戦。

Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｃａｒｎａｔｉｏｎ（１９８１）☆　６月２０日から８月１５日にかけて行われた作戦。第３２大隊の他に第４４落下傘旅団、第１０１大隊、第２０１大隊、第７０１大隊、第５偵察連隊も参加した。

Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｐｒｏｔｅａ★

Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｋｏｎｙｎ　（ｒａｂｂｉｔ）（１９８１）☆

Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｄａｈｌｉａ◎　１０月２日から１１月３日にかけて行われた作戦。

Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｈａｎｄｓａｋ（Ｈａｎｄ　Ｂａｇ）（１９８１）◎　１０月１２日から５月３０日にかけて行われた作戦。

Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｄａｉｓｙ（１９８１）★　第３２大隊の他に第６１機械化大隊、第２０１大隊、第１落下傘大隊、第５偵察連隊も参加した。

Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｏｌｙｆｈｏｕｔ（Ｏｌｉｖｅ　Ｗｏｏｄ）（１９８２）◎　２月１７日から２月２７日にかけて行われた作戦。

Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｓｕｐｅｒ　（１９８２）★　第３２大隊の他に第５偵察連隊も参加した。

Operation Boomslag（Tree Snake）◎ 5月13日1800時から5月15日1030時にかけて行われた作戦。

The Spiderweb Project◎

Operation Fakkel（Torch）（1983）◎

Operation Kwartel（Quail）◎

Operation Snoek（1983）◎

Operation Dolfyn（Dolphin）◎ 4月25日から6月3日にかけて行われた作戦。第32大隊の他に第44落下傘旅団も参加した。

Operation Askari（1983）★ 11月26日から6月20日にかけて行われた作戦。T－54／55が登場。

Operation Opsaal（Saddle Up）◎ 6月20日から3月19日にかけて行われた作戦。

Operation Screla◎ 2月19日から3月20日にかけて行われた作戦。

Operation Forte◎ 9月1日から4月29日にかけて行われた作戦。

Operation Bolson◎

Operation Calutz◎

Operation Egret◎

Operation Wallpeper★

Operation Jerry◎

Operation Gomma◎

Operation Southern Cross（1986）◎

Operation Alpha Centauri（1986）★

Operation Fullstop（1986）◎

Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｋａｋｅｂｅｅｎ　（１９８６）◎
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｒａｄｂｒａａｋ（Ｍａｎｇｌｅ）◎
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｍｏｄｕｌａｒ　（１９８７）★
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｈｏｏｐｅｒ　（１９８８）★
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｐａｃｋｅｒ　（１９８８）★　第３２大隊の他に第４４落下傘旅団、第１９ロケット連隊（ＭＲＬｓ）、第４偵察連隊、ＵＮＩＴＡ（第３、第４、第５大隊）も参加した。
Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ　Ｈｉｌｔｉ／Ｈｘｉｔｅ　第３２大隊の他に第６１機械化大隊、ＳＷＡＴＦ（第１０１大隊、第１０２大隊、第２０１大隊、第９１１大隊）も参加した。戦況の推移を見ると対峙した敵との戦力差に驚く。

第３２大隊が、ひたすら戦闘を繰り広げていた事が一目瞭然だ。アンゴラ介入当初は、第３２大隊が単独で作戦を行う事が多かったが、後半は他のＳＡＤＦやＲｅｃｃｅ、ＳＷＡＴＦとの共同作戦が多い。また、実際の部隊運用では、大隊が一つにまとまって動くよりも、中隊単位でバラバラに運用される事が通常だった。

☆：英語版ｗｉｋｉに作戦名のみ記載している物。資料的価値はない。他の書籍で調べる事を奨める。
★：英語版ｗｉｋｉに記載されいる物。参考資料にはなる。これだけではなく、自分で調べる事も必要。
◎：英語版ｗｉｋｉに記載されていない物。書籍には記載されていた。

初代大隊長のブレイテンバッハは１９７５年から１９７７年まで就任していた。９３年に大隊が解散されるまで輩出された大隊長は合計で６人となる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9344z/

南アフリカ軍事史１９７５－１９８８

2012年1月6日03時10分発行